

臨床場面を想定したシミュレーション教育の取り組み ～急変対応における教育の課題～

切本真喜 藏留未和 山口真美

大阪府済生会中津病院 看護部

抄録

A病院では、臨床ラダーレベルⅠ・Ⅱ・Ⅲの看護師を対象にそれぞれ救急看護の研修を行っている。より高度な実践力を問われる救急看護において、今後リーダーの役割を担うラダーレベルⅢの看護師を対象に、臨床場面を想定したシミュレーション教育を取り入れた。そして、研修終了後に実施したアンケート結果をもとにシミュレーション教育の評価を行った。

Key word：救急看護 急変対応 シミュレーション教育

背 景

A病院では、臨床ラダーレベルⅠ・Ⅱ・Ⅲの看護師を対象にそれぞれ救急看護の研修を行っているが、より高度な実践力を問われる救急看護において、今後リーダーの役割を担うラダーレベルⅢの看護師を対象に、臨床場面を想定したシミュレーション教育を取り入れた。

目 的

ラダーレベルⅢに属する救急研修の受講生に対するシミュレーション教育の評価を行う。

方 法

対象期間：令和6年5月から令和6年9月

研修方法：閉床病棟を使用し3つの急変場面（デイルーム・トイレ・ベッド上）を設定し、受講者は各場面をローテーションする。その際にリーダーや発見者の役割を経験する（図1）。

データ収集方法：研修終了後、ラダーレベルⅢに属する受講生49名にアンケートを実施。

分析方法：アンケート結果を集計し、看護部教育委員会と共有して研修の評価を行う。



図1

受付け：令和7年2月26日

結 果

アンケートの回収率は71.4%で、院内で急変対応を経験したことがある者は68.6%，その際に担当した役割は外回りが79.2%と最も多く、胸骨圧迫が62.5%，医師の指示受けは4.2%であった（図2）。

場面設定における研修の学びについては、デイルームとトイレの場面では移送方法が、それぞれ60%，

77.1%と最も多く、ベッド上の場面では、リーダーの役割が42.9%，応援要請の方法が37.1%，BLSの継続方法が37.1%とほぼ同等の割合であった（図3）。また、研修前に救急対応に不安やストレスがあると答えた者のうち、研修後に「軽減した」と答えた者は50%であった（図4）。

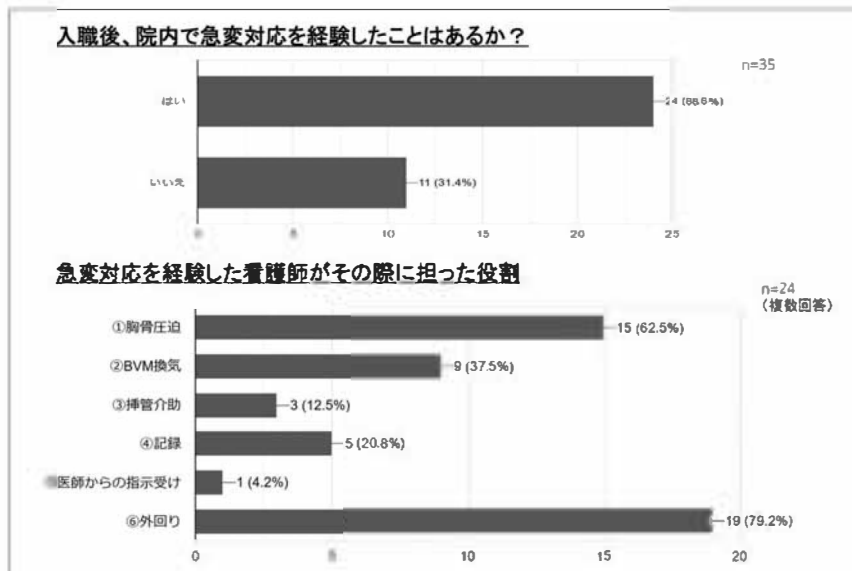


図2

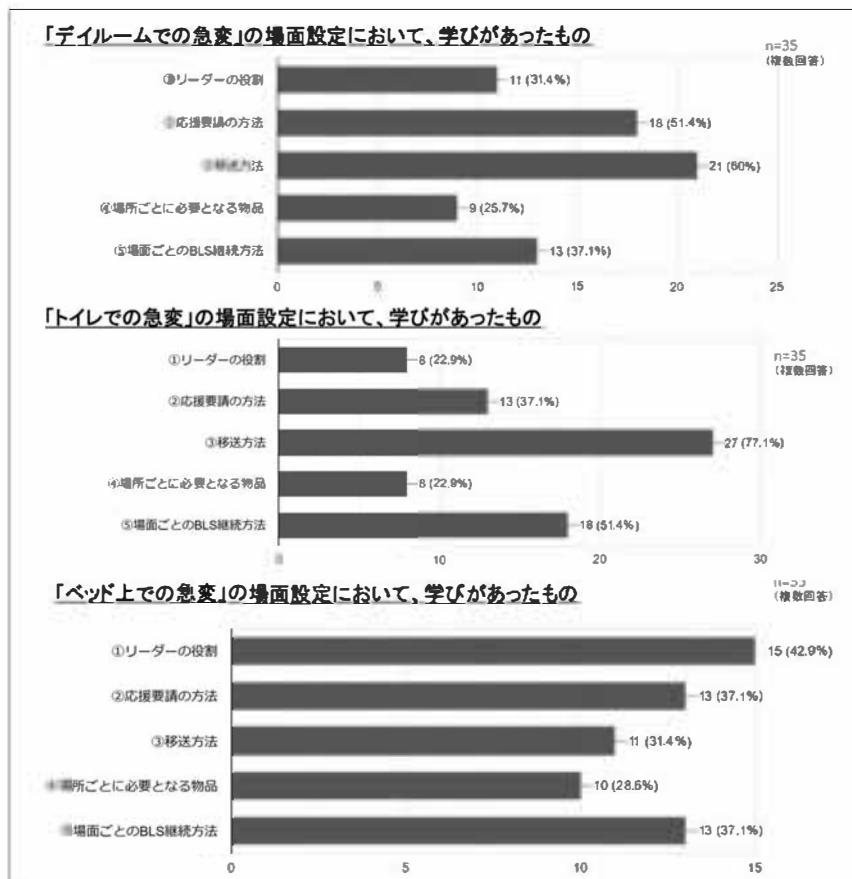


図3

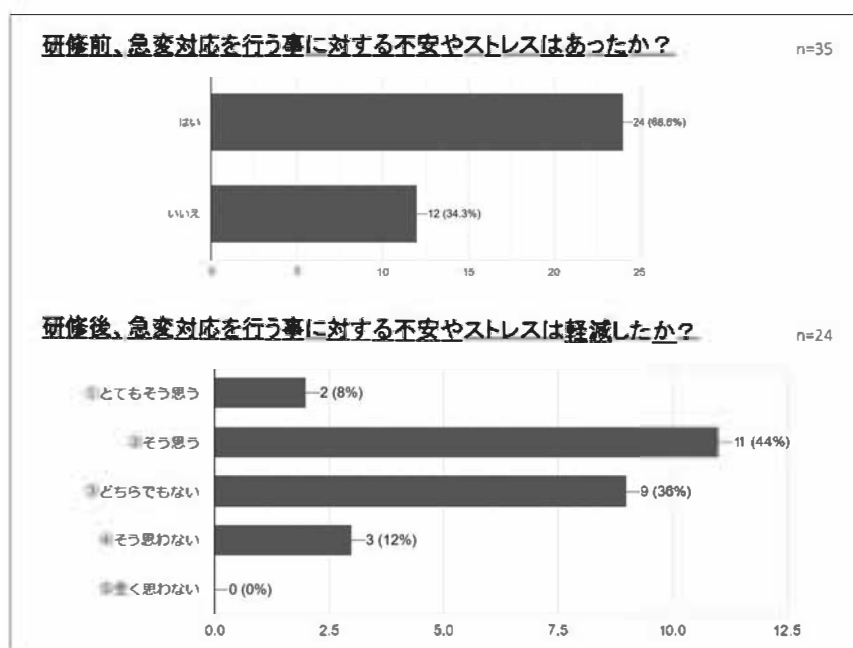


図 4

考 察

受講生の多くは急変対応の経験はあるが、ラダーレベルⅢという成長過程から、リーダーの役割ではなく、外回りや胸骨圧迫の指示を受けて実践することが多かったと考える。これまでの救急看護の研修では、蘇生人形を床に設置しBLSを実施してきたが、今回のように具体的な場面設定を行ったベッドの場面では、リーダーの役割と同時に、応援要請やBLSの継続方法も学びとして挙げており、急変時対応の一連のイメージが理解できたと考える。また、デイルームやトイレの場面においては、安全かつ効果的な救命処置を行う環境を作ることが必要となるため、応援要請や移送の方法に関する具体的な学びが多かったと考える。急変対応は、緊迫した心理状況の中で瞬時に正確な判断や技術が求められるため、単回の研修受講のみでは不安やストレスが軽減することは困難と言える。

結 論

急変対応のシミュレーション教育は、役割や行動を具体的にイメージすることに有効であるが、繰り返しトレーニングを重ねる機会を設けていくことが課題である。